

■フォーラムの要約

山崎市長

限界集落は綾部市だけでも50、全国で1万を超えています。そんな中、「全国水源の里連絡協議会」には179の市町村が集まりました。「水源の里」は、限界集落のこと。綾部市水源の里条例の理念は、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。森の木々による涵養と保水のおかげで、下流にいる魚や人に恩恵が与えられます。限界集落の住人は、その森の守り人なんですね。綾部市で最初に指定した山間部の5つの集落では5年間、インフラ整備や定住の促進、栃の実や落など特産品の開発、畑のオーナー制度などを実験的に進め、計11世帯28人が移住してきました。牽引役となった85歳のSさんは、「人生の中で、こうしてがんばっている今が一番幸せ」と。私の世代は若いころ、一刻も早く綾部を出たかったけれども、今の中学生に聞くと半数以上が「一度は出たいけれど、いずれ戻ってきたい」と。価値観が大きく変わってきているなと感じています。

シキタ純

限界集落が抱えている様々な問題の解決策を探ることが、一つのブームとなっています。グリーンツーリズムや田舎への移住にも関心が高まっており、限界集落のいい面を洗い直すことが必要です。綾部に行くと、90近いおばあちゃんが毎朝バイクに乗って作業所に行き、栃の実をすり潰してクッキーを作っている。東京では見られない光景です。限界集落では、何がそうさせているのか？そこで全国を調査し、各地域のイキイキ指数を出していきたいと考えたのです。綾部では、食の自給率や隣人とのつながり、仕事のやりがい、心身の健康、郷土への愛着などの項目で予備調査を行いました。全体的に高かったですね。こうした指数化によって、自治体間でも住民の幸せ度アップをめざして施策を共有できるようになるほか、企業

が様々な形で限界集落を応援しやすくしていけると思います。

藻谷浩介

今は無価値だとして眠っている里山の資源—耕作放棄地、立木、半端モノ農産品、退職者、野獣—を活かすと、水と食料と燃料が一定程度自給できるんですね。捨てていたものが高額で売れる、「手間返し」というように物々交換ができる。しかし東京では金がないとどうしようもない。水も自給できないので、深刻な大地震が来て水道水が止まれば都民の多くは死ぬことになります。東京の出生率は1.1以下、100年もすれば子どもがいなくなってしまうサイクルを作ってきたことが、マネー資本主義の一つの限界なんです。関西圏でも、2020年までの10年間に60万人が減少する中、75歳以上は43%も増えるといいます。この方々に、里山への移住あるいはセカンドハウスを持つことをお勧めしたい。高齢者が田舎で仲良くイキイキと暮らせば「金喰い虫」にはなりません。また田舎に仕事さえ作れば、若い人、特に女性も安心して移り子育てをしながら働くことができますね。

「里山なんかより、国際競争だ」といった声もありますが、日本はアジアや米国への輸出で稼ぐ一方、産油国などから化石燃料を輸入しかなり貢いでいる。しかし木で家を建て、木くずを燃料にすればエネルギーの何%かは自給でき、逆に外国への依存を減らせます。オーストリアでは、針葉樹を集成材にして中低層の建築物を作り、木くずと水力を合わせた自然エネルギーは3割まで達しています。森林管理のできる人間を育て、職業として成立させているんですね。

「里山資本主義」は、マネー資本主義の欠陥を補うサブシステム（保険）なのです。「みな里山に住むなんてできない」「100%の自給なんてありえない」と批判する人には、使い分けをしながら「おいしいとこどり」という発想がない。しかし例えば、稚内では木はなくても風力でエネルギーの100%をまかなっています。

す。多様な地域があつていい、里山資本主義をいろんな比率で混ぜ合わせていけば、うまくいくはずです。特産品をブランド化して売り出す。域内の食材や建材を使い、域内の未就労女性や障害者を雇用する。可能な限り、地域産のエネルギーを使う。その3つによって、地域は活性化するのです。

■イキイキ応援団結成トーク

シキタ純

近年、若い人たちから「地域活性化をやりたい」「将来は、田舎に住みたい」という声が多く聞かれます。これは、トレンドと言ってもいい。生物の本能として、「田舎」という場所にいたいと感じる人たちが増えているとも感じます。彼らが田舎へ移って新しいことを始めるのに、受け皿となる側には何が必要でしょうか？

塩見

僕が書いた『半農半Xという生き方』は台湾やタイなどの東アジア、それから英語圏からも反応を頂き、もしかしたら多くの国々に伝わるコンセプトではないかと嬉しく思っています。僕は10年、地域資源を発掘し発信してきましたが、住民の「X」に気づいて光を当てていくことも大事だと思っています。

山崎浩介

水源の里プロジェクトでは本来Uターンをめざしていたのですが、実際に移って来られるのは都市住民の方々。危機感や価値観の多様化が、一つのうねりになっているように感じています。僕らの頃は1日も早く綾部を出たかったけれども、今の中学生に尋ねると半数以上が「一度は外に行きたいけど、いずれ綾部に帰ってきたい」。親たちにも、もっと自信と誇りを持って自分たちの街を伝えてほしい。我々はその受け皿として輝いた地域を作っていこうと思っています。市に定住促進課を

設置し、ワンストップで仕事や家、子育ての面倒を見られるようにしました。既に
移り住んできた方々の言葉やネットワークが何より大事だとも感じています。

藻谷浩介

田舎の集客と交流を拡大していくには、儲かっている人たちがもっと域内でお金を
落とすような需要をプロモートすること。スイスのように、地域産で、高いけれど
も誇りを持てるような製品をみなが買うような習慣が定着していけば、移出産業
のあまりない地域でも経済が回っていくでしょう。

シキタ純

今日のフォーラムをきっかけに、みなさんで限界集落を応援していきましょう。
引き続き、フォーラムやワークショップを開催していきますので、よろしくお願
い
します！